

# デカルトの心身合一概念の形成に対する 「内的感覚」の役割について

豊岡 めぐみ

はじめに

## 第一章 『省察』の内容と構造

- 一 『省察』の不整合についてのデカルト研究者たちの見解
- 二 「第六省察」における心身合一
- 三 感覚の実践面における役割
- 四 心身の健全さ
- 五 「実体的合一」についてのデカルト的解釈

## 第二章 「エリザベト宛書簡」における心身関係論

- 一 エリザベトとの文通のはじまり
- 二 デカルトとエリザベトの心身の相互作用
- 三 心身関係論に対するデカルト自身の見解
- 四 「原初的概念」としての心身合一
- 五 『省察』の解釈—第三の小林説をめぐって—
- 六 デカルトの心身合一に対するデカルト研究者の諸見解

## 第三章 デカルトの「内的感覚」

- 一 「人間論」における感覚
- 二 『省察』における感覚
- 三 「人間論」から『哲学の原理』までの「内的感覚」の変遷
- 四 エリザベトに語られた心身合一概念の新しい解釈

むすび

デカルトは精神と身体を区別し二元論を打ち立てたことで有名であるが、二元論

とは独立に心身の合一をも認めている。果たして、デカルトの心身合一概念とはどのようなものなのだろうか。デカルト哲学の体系について様々な解釈が為されてきたのだが、それは大きく分けてマーシャル・ゲルー、フェルディナン・アルキエ、小林道夫氏の見解に分類できると筆者は考える。本稿は、三者がデカルトの心身の区別と心身の合一という相反する事態をどのように解釈しているかを吟味しながら、デカルト自身はそれにどのような解決法を示唆しているかを考え、その難点を示したものである。心身合一概念は「第六省察」で導入され、それによって互いに異質である精神と身体がどのように相互に作用しあうのかという問題が引き起こされる。実際、デカルトはその問題に松果腺を持ち出し、精神と身体は松果腺を接点として相互作用を行うと考え、心身合一の生理学的なメカニズムまでも構想している。しかし『省察』本文ではメカニズムに関しては十分な説明が為されていない。デカルトがはじめてその問題に答えたのは1643年の「エリザベト宛書簡」の中である。それゆえ、デカルトの心身合一概念の意味を解明するには『省察』、「エリザベト宛書簡」のどちらも重要であり、それらにおいて論じられる心身合一概念にスポットを当て、デカルトの思想の中でそれがどのように扱われているのかをみていく必要がある。

第一章では、『省察』の内容と構造をゲルーとアルキエそれぞれの批判を参照しながら分析する。そして、心身合一概念がデカルトによっていつどのような形で示されたかを検証する。ゲルーによれば、デカルト哲学は一つの体系を為しており、それは一貫した論理的なものであると考えられるのに対して、アルキエによればデカルト哲学は体系をもっておらず、彼の思想は年を重ねるにつれて異なるものを表し、次第に進展していったと解釈される。デカルトは、「第一省察」から「第五省察」までは外界の存在を疑うのだが、「第六省察」においては外界の存在を考え直す。すなわちデカルトは「第一省察」で語った内容を「第六省察」で身体的観点を導入させ感覚への疑いを留保する。なぜなら、感覚について再検討を為すことによって感覚の実践的な役割が明らかとなり、「第六省察」後半では心身が合一した限りの人間が語られているからである。

第二章では、「エリザベト宛書簡」に着目し「原初的な概念」といわれる心身合一概念や心身の関係について考察する。さらに小林氏によって示された解釈が『省察』の自然な読み方に基づいているのかどうかを検証し、その問題点を指摘する。重要

なのは「人間精神には二つのものがある」と述べられていることである。二つのものとは、一つは「精神が思惟すること」であり、もう一つは「精神は身体に合一しているがゆえに身体と働き合うこと」である。「エリザベト宛書簡」において、精神は純粹知性によってしか理解されないが、身体すなわち延長、形、運動は想像力に助けられた知性によってはるかによく理解されること、そして精神と身体の一合は、純粹知性によっても、想像力に助けられた知性によっても漠然としか理解できないが、感覚によって明晰に理解されることが述べられている。小林説は、この「エリザベト宛書簡」で語られる心身合一概念を額面通り受け取り、さらに二つの異なるものが同じ一つのものであるということは「概念的に矛盾している」というデカルトの言葉を受けて、心身の区別と心身の合一を同じ次元で同時に語るならば矛盾を犯すことになるが、それぞれ語られる次元が異なっているならば整合的な理解が得られると主張する。小林説は、デカルト哲学は彼のあるテキストのある部分だけを考察するのではなく、すべてのテキスト全体から考察しなければ哲学者の真の思想を理解することはできないと考えることによって、ゲルーの厳格な態度には従わねばならないという。しかし、そう述べながら小林説はアルキエによって示される、「デカルト哲学は次第に進展していった」という解釈をも認めている。こうした小林説の矛盾しているかに見える側面は、両者の長所を活かそうとし、心身の区別と心身の合一という相反する事態を認めざるを得なくなったために生じたように思われる。その解決法として小林説は、心身の区別を理論的次元において捉え、心身の合一を実践的次元において捉えれば不整合を避けることができるとして、それぞれを二つの次元に分割することを提案する。しかし、われわれはデカルト哲学をこのように二つに分割することは却って心身の区別と心身の合一とが別々のものであって両者が係わりをもたないということを強調してしまうだけだと考える。それゆえ、われわれは二つの次元に分けることは逆に不整合を際立たせることに繋がると考える。

第三章では、「人間論」から『哲学の原理』までの「感覚」について論証する。小林氏による(心身合一概念)解釈の妥当性を探査するために、心身合一の証であるといわれる「感覚」に再度着目し「内的感覚」について探究する。

以上のことから、『省察』における心身合一概念の難点は、デカルト自身の主張に一貫性がないことやデカルト自身が述べているようにそれについては「ほとんど

何も論じてこなかった」ということに尽きる。それゆえ、小林氏に代表されるように、「エリザベト宛書簡」を『省察』の解釈に援用し、理論的次元と実践的次元に分割して『省察』のテキスト上の不整合も心身関係論も共にうまく解決できるというのが一般的な解釈となっている。われわれも小林氏の書簡を『省察』解釈に援用するという方法論を支持するが、われわれが小林氏と真っ向から対立するのは心身合一の捉え方である。小林氏のいうように精神と身体を一つのもののみなすことは、日常的生における見方であることはある意味で当たっていると思われる。しかし、小林氏のように心身合一を省察以前の日常に帰ることと理解することは避けねばならないことである。なぜなら、デカルトの説明にあるように、合一は「本性による一性」と「複合による一性」があるのだが、省察をすることのない段階ではわれわれは誰しも皆、合一を「本性による一性」と誤解しているからである。心身合一概念はわれわれが第一章および第二章において論じるように、確かに実践的枠組みの中で捉えられ、それは感覚の再検討や「経験」によって捉えられるものである。しかしながら、心身合一概念は感覚によって「経験」すればそれで十分であると言われているわけではない。心身合一は心身の区別を経てはじめてその「複合による一性」という意味が付与されるからである。

(とよおか・めぐみ 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学)